

## 満州引揚体験記

岩手県 沼田勇一

私が、満州に渡ったのは昭和十三（一九三八）年五月で、当時岩手県九戸郡種市町平内小学校教師在職中に満州国官吏の募集があったので、広大な荒野満州の地にあこがれて応募することにした。東北地方の採用試験は仙台市で実施され、可否を待っていたところ、幸い合格と共に採用通知が届いた。校長先生に理由を話し教員を辞職したい旨述べてお願いした。当時教員が不足していたのでなかなか難しいとのことであったが、ようやく許可されたので満州行きの準備をし、赴任の途についた。

当時は、下関から関釜連絡船で朝鮮の釜山に上陸し、直ちに汽車に乗り京城（ソウル）経由で新義州から鴨緑江を渡り、満州国安東市に到着。ここは満州国であるから、税関の検査を受け一路新

京（長春）に向かった。新京市で乗換え、吉林市の吉林省公署に向かった。吉林駅で下車、そこから十分くらいで吉林省の公署実業庁農林課に到着し、課長に着任のあいさつを行った。

課長は岩手県出身の大沼幹三郎氏で、盛岡高等農林学校を卒業された方で、卒業と同時に満州に渡ったとのこと。当時三十一歳で省公署の農林課長であったから、早い出世であったと思われる。あいさつに行ったところ、「遠路御苦労であった。到着を待っていた。君は学校職員の経験があるようだから、省公署東向かいの吉林省立農事訓練所の技士を命ずる」という辞令をもらい、勤務することになった。異国で同郷の方と会うことは大変心強いもので、しかも同じ紫波郡の旧赤石村の出身であった。

吉林省立農事訓練所は同省立農業試験場と併設されており、吉林市の松花江岸にある風光明媚な場所であった。柳の木、榆の木々が道路沿いにくさん伸びている吉林市の河南公園という所であ

り、休日などは見学者が大勢集まる名所でもある。

この訓練所は満州国の農業指導員の育成所であったから訓練は大変厳しく、寄宿舎に全員入所し共同生活であった。昼食などは毎日一緒に食べ、高粱のご飯にみそ汁、生ネギにみそを付けて食べたが、私も農村の生まれであるから粗食には耐えられた。中国人の常食は高粱であるから、豚肉などはときどき食べる程度で、普通は一般的に粗食である。五月端午の節句とか、年越し・新年のお祝いなどは誠に盛会であったが、経費は毎月一定であるため普段は節約し、お祝いの行事などのために向けていたようである。

昭和十五年ころになると、満州の食糧事情も厳しくなり、高粱、野菜の供出要請が政府から発令されるようになったが、供出は順調に完了した。

これは関東軍の要請で行われたのだが、満人（農家）の供出完了者に対しては、彼らが最も喜ぶ綿布の特別配給があり、これが効果をあげた。

食糧の供出がだんだん厳しくなり、吉林省立農

事訓練所より、吉林省徳恵県公署農林課に食糧供出要員として応援勤務を命ぜられ着任した。

そして徳恵県内農村の食糧供出に当たり、農村を回る日々が続いた。興農合作社（日本の農業協同組合に当たる）の職員と共に町村役場などにおもむき、要請やら督促やらに回り、また県の中心部への食糧運搬状況を調べる任務にも当たり、関係者と連絡を取りながら推進した。

冬の訪れと共に応援勤務が終わり、昭和十五年十二月、吉林省公署に戻ったところ、食糧供出の応援経験から吉林省長春県公署に転勤命令が発令され、昭和十六年一月十日長春県公署産業課技士を命ぜられて、赴任することになった。

長春県公署は新京市の中心にあり、満州国の政府機関が設置されている満州国行政の中心地である。せっかく中央に転勤になったので、国立大学の受験に挑むことにした。選んだのは、満州国立新京法政大学法学部特修科であった。約三倍強の競争率であったが、何とか突破し合格することが

できた。

合格者は法学部百人中、日系は五十パーセント、中国系、朝鮮系、蒙古系併せて五十パーセントであった。日系以外の学生は日本語二等通訳以上でない受験できない規定になっているので、外国系の受験生は大変だったと思う。大学の場所は新京市南嶺で、この土地は満州事変の日本軍と中国軍の古戦場の跡地で、満州国の国立大学がこの場所に集中建設されている所であった。入り口は満州工業大学、次は同法政大学、同医科大学、同畜産獣医学、大同学院。向かいには大陸化学院、その奥に満州建国大学が建設されていた。ここが古戦場であったとは夢にも思われない学園都市へと変わっていた。そして、日本、中国、朝鮮、蒙古、ソ連の五族協和の地となっていることを思うとき、時代の流れの速さを痛感させられた。

法政大学の教授陣は、日本の大学とあまり変わりがなかった。日本国の憲法に当たるのは、満州国では満州国基本法と称し、「八紘一宇」を基本と

て、「秘かに入隊するよう」にとの達しがあった。歓呼の声で見送られることもなく、家族の見送りも禁止され、各々が一人一人音もなく列車に乗り出征したのである。入隊する部隊は黒龍江省虎林県にある歩兵第四十四連隊であったが、この部隊は香川県丸亀市の第十一師団隷下の部隊で、香川、愛媛、高知、徳島の四国四県の出身者で編成されていた。

虎林はソ連と満州の国境の町で、いつソ連軍が越境してくるかもしれない危険な所であった。中隊は、高知県出身者が主力の石黒中隊(第六中隊)であった。午前五時半に起床ラッパが鳴ると共に飛び起き、寝具を畳み兵舎外に整列して、朝の点呼を受ける。

当時、戦争が一層拡大し大東亜戦争へと進み、日本国にそれだけの力、特に食糧が有るだろうかという疑問を持っていた。なぜかという、前に吉林省公署の食糧関係の仕事に従事し、関東軍より依頼の食糧供出の応援をしてきたからである。しか

して日本と満州国とが一体で結ばれるように記載されていたようである。

学長は昭和十六、七年当時は田所耕耘先生、次に昭和十八年柴田健太郎先生であった。刑法、刑事訴訟法は岩崎二郎教授、民法・法理学は法学部長の柚木馨教授で、この方は後に神戸大学長にされた。経済学部長中西仁三、行政法高橋貞三教授、財政学玉井茂教授、国際法は黄演淮教授で、この方は中国人で京都大学を卒業されて、日本語も日本人と変わりなく話される方であった。主だった教授は以上のとおりであったが、ほかにも多くの錚々たる方がおられた。

入学してあつという間に二年が経過した昭和十九年一月に、戦争のため四月進級を一月に繰り上げて、三年生に進級した。大東亜戦争となつたので、年限も繰り上げて若者も参戦するようになっていた。三年生になってすぐの昭和十九年三月の春には、関東軍より召集令状がきて入隊した。その当時になると送別会も見送りの禁止されてい

し、戦線が南方作戦やビルマ作戦と拡大し、一方では満州にある弾薬や武器を、ソ連との国境に保管していたものを毎日のように南方戦線に輸送したのである。私たちも一期の検閲が終了し、初年兵全員が一等兵に進級し、一安心というところであった。

冬期の厳寒の訓練も終わると、今度は暖かくなつたので各地にある部隊への転属命令が発令され、私も昭和二十年四月十日に歩兵第二百八十連隊に転属を命ぜられた。この部隊は朝鮮、満州、ソ連の国境が接し、かつては張鼓峰事件のあつた三角地帯の国境警備隊である。

日本軍とソ連軍が毎日相対し睨んでいる所で、陣前に約二百メートルの中間地帯があり、その中間地帯には両軍とも入ることのできない約束があり、両陣地には鉄条網が張られているので、たとえ一歩たりとも中間地帯に入ればすぐに弾丸が飛んでくるという状況であった。夜は少しぐらいい入っても大丈夫だろうと思つたのか、味方の兵隊

が夜間に鉄条網を越えて二メートルくらい入ったところ、直ちに弾丸が飛んできて、足の一部に当たり騒動したことがあった。

このような状況で、少しも油断ができない国境地帯であった。また、当方の陣地からソ連の兵隊の訓練状況もつぶさに見ることができるところでもあり、誠に重要な国境線である。

我が日本軍の陣地もソ連軍の向かい側の高所に在り、重機関銃十数台及び高射砲などを据え付けていて、いつでも発射できる態勢を整えていた。

我が方の陣地は山の裾野を掘り、土中に兵舎を建設して東南二カ所に出入口を作った。普通、山中腹から炊事のための煙が昇るので、日本軍が山腹の壕で生活していることを、ソ連軍も知っているものと思われる。陣地内のことはお互い秘密にしているので、詳細は分からないと思うが、実際はおおむねの様子は分かっていたものと思う。

昭和二十年七月三日付で第二百二十七師団挺進大隊よりの募集があつて、その選抜テストが行われ

の収容所であつて張鼓峰の警備隊の同僚だった兵隊に会い聞いたところ、生き延びたのは同部隊では彼一人だけのことだった。私も転属しないでおれば屍の山の一人になつていたと思ひ、運の良さを痛感した。

彼に、どうしてあなたは生き延びたのかと問うたところ、機関銃が私には当たらなかつたので暗いうちにその沢を下り、朝鮮民家にたどり着いて救いを求めて生き延びたとのことであつた。

第二百二十七師団挺進大隊は、昼は寝て夜間に活動するという特殊部隊で、夜間に目標とする高層ビルや鉄橋の構造などを調査していた。この部隊も、八月に入ると訓練は一層本格化した。八月九日にはソ連軍が突如として満州国境を突破して満州国に侵入したという情報が入つたので、訓練を中止し我が挺進大隊も満州北東部国境に向かつて前進した。その途中、ソ連軍の飛行機が襲撃してきて、部隊に攻撃を加えるということもあつたが、全員無事であつた。

たが、全員テストの対象となつた。先輩から聞いたところでは、これは鉄橋、ビル等建造物を爆破する部隊を編成するための募集であるから、危険な部隊であるとのことだった。条件は身体強健で敏捷なことであつた。私も若いときは陸上競技の選手だったので、特別に希望はしないが、合格するかもしれないという予感があつた。

体力試験の結果が発表され、私一人が合格と判定され、間島省延吉市所在の第二百二十七師団挺進大隊に転属を命ぜられ、国境警備隊より一転して教育隊に転属となつた。

昭和二十年八月八日、ソ連が日ソ中立条約を一方向的に破つて大戦に参戦し、予想もしなかつたソ連軍がソ満国境を一気に越え、夜中になつて張鼓峰国境警備隊を襲つた。土中の兵舎から出てくる兵隊を二つの出入口で待ちかまえ、次々と射殺した。二つの出入口には屍が山をなしたということである。

それを知つたのは、後日私も捕虜となり、原隊

しかし、一回目の情報では大東亜戦争も停戦協定が成立したということが流されたが、部隊はその情報は無視していた。数日後にソ連軍が越境して「日本は無条件降伏したので武装解除する」と言つた。我が部隊はソ連軍の立ち会いで武装解除し、小銃、機関銃、手榴弾、軍刀、弾薬などが山のように積まれ、全部ソ連軍に引き渡した。

さらにその後に入手した情報で、「八月十五日停戦協定が成立した」と知らされ、それではお互いに停戦するのと思つていたところ、また情報が入り、日本は大東亜戦争に無条件降伏したということが分かつた。

誠に遺憾なことであつたが、国境にはラジオもなく、当時はもちろんテレビなどない時代で、大隊本部の発表だけが頼りであつた。

昭和二十年八月ころの話であるから、当時は情報の伝わり方が大変遅れていたと思う。これで残念ながら大東亜戦争も終わったという感じだった。我々のそれまでの最前線における死に物狂いの訓

練と戦いは、何のためであったか空しく感じられた。

それから原隊の所在する間島延吉市の部隊に戻ったところ、その原隊は日本軍の捕虜収容所に変わり、次々と日本軍の兵隊が集結し始めて大部隊となった。また、満州国境の陣地には日本軍の食糧も衣料も十分に保管してあったのに、それをソ連軍が全部本国に輸送したのである。

ソ連軍がいかにも物資が欠乏していたかというところがうかがわれた。ソ連兵を見ると日本軍の軍靴を履いていたが、靴下もなく日本軍から没収した綿布を切つて足に巻き、靴下の代わりにして履いている。日本軍の服を着ている兵隊も大分いた。しかし、戦いに負けた兵隊としては致し方なく、当方は捕虜収容所の人となった。

一週間もしないうちに、毎日のように一個中隊二、三百人くらいの単位で兵舎を出て行くので、どこに行くのかとソ連兵に聞くと、内地に帰るため清津、羅津の港の近くに集結することのこと。そ

看守がいつも見張っているので見付かると逃亡者はその場で射殺された。死体は当収容所の本部に持ち込まれるので、大変であった。一日も早く帰りたい一心から、注意されてもなかなか徹底しなかった。兵隊は、内地に一日でも早く帰れることを夢に見て毎日生活しているのであるから、やむを得ないことであると思う。

十二月に入ると、捕虜に対する衛生管理が良くないので、発疹チフスにかかり死亡する者が多く出た。発疹チフスにかかると、四十歳前後の人、またそれより若い人は体力があるので何とか快復するが、五十歳を越える人は大方死亡した。日が経つにつれて捕虜収容所も食糧が不足してきて、米のご飯などが見ることができなくなった。一日二食の高梁粥の食事で、野菜もなくおかずもないので、若くて元気のよい兵隊でも日一日と衰えていくばかりであった。

そのころになると、かつては関東軍の精鋭と称された日本軍の姿は見る影もなかった。食べ物に

して、日本から迎えに来る船を待つのだということであった。それらの人々を見送りながら、私たちはうらやましかった。

私は日本兵捕虜収容所の本部から呼び出され、「君は満州国政府職員の経験もあり、満州国の学校も出ているようだ。満州国内の事情に精通していると思うから、捕虜収容所の管理事務所勤務するように」と命ぜられ、翌日から勤務することになった。

与えられた事務は、捕虜収容所に入ってきた人数を階級別に報告、また出て行った人数も階級別に報告するものだったから、何千人の数合わせは大変な仕事だった。何とか内地に早く帰りたい一念で、真面目に勤務に精励することとした。

捕虜収容所の事務所はソ連軍の管理事務所の向かい側にあり、伝令は毎日のように事務所に来た。夜は日本兵の逃亡があるので、夜間の行動は特に厳しい管理下にあった。四、五メートルもある高い鉄条網を越えて逃亡する者がいたが、ソ連兵の

飢えた兵隊は、使役に駆り出されると、大豆を運搬する荷車からこぼれ落ちる大豆を競争で拾って兵舎に持ち帰り、煎って食べる有様であった。

十二月から一月ころになると、頭がおかしくなる者も出てきた。「〇〇一等兵、申告に参りました。このたび内地帰還を命ぜられ、明日出発し函館港に上陸し、札幌に帰ることになりました」とみんなの前でまじめな顔をして申告をする兵隊がいたので、「それは良かった、良かった。」とみんなで相槌を打ってやったが、翌朝には彼は死んでいった。内地に帰ることを夢見て死んでいたのである。

そのころになると気温は零下三十度以下にもなるから、毎日十人とか十五人とかの兵隊が死んでいった。兵隊の中に元僧侶だった者もいるので、毎日兵舎の庭でお経をあげ、土を掘り五段重ねで埋葬した。十三人のときは、三人の所には土を掛けず菰を被せておき、翌日二人を追加して土を掛

けて葬った。厳冬の土掘り作業も大変であった。三月下旬ともなれば、寒さも緩んできて雪も解け始めたので、兵舎の庭に仮埋葬した兵隊の遺体を間島延吉市の日本人墓地に移したが、その数は何百体にものぼっていて正しい数を確認することはできなかった。

延吉市の捕虜収容所には、軍人だけでなく一般の日本在住者も収容されていたが、幼い子供はほとんど発疹チフスにかかり死亡した。収容所では、おおよそ千人以上の日本人が死亡したものと想像される。冥土の旅にたれた方々のご冥福を祈り、その遺骨の収集が一日も早くできれば幸いと念じている者の一人である。

三月半ばを過ぎたころ、ソ連軍が収容所における日本軍の捕虜と一般邦人の管理を中国共産党八路軍に引き継ぎ、ソ連に引き揚げた。共産八路軍が収容所の管理を始めて間もなく、収容所における食糧が不足していることを知り、食糧の自給自足のため新京の南西の公主嶺（吉林省懷徳県公主

嶺）にある満州国立農業試験場の付近に行き、食糧生産を行うことを考え、将校を除く屈強の兵隊約千人を集めて、食糧増産隊として編成しろという命令が出された。早速に編成作業にかかり事務局が中心になって編成が行われた。私も事務局に勤務していたので、この編成に参画し公主嶺に行くことになった。

移動のための貨車が到着したが、それは無蓋車で便所もないので、排便の際は走っている貨車から同僚二人が両手を取り外に向かって脱糞するという、誠に原始的な方法であり想像もできない風景であった。

翌日、公主嶺に到着し全員下車して構内で休憩した。千人の中からさらに体力のある者五百人を選抜して、午後、四平街に向かって徒歩で前進し到着した。私もこれからの農場経営が楽しみであった。到着したら、八路軍の将校から四平街の空家になつていいる日本人住宅に宿泊すると言われた。明日からは食糧生産作業に従事するものと思つて

気持ちのうえから大張り切りでいたが、それは嘘だった。共産八路軍が、中国中央軍（蔣介石軍）との戦闘のために八路軍が使う陣地の塹壕掘りのための作業だった。このような状態において八路軍も本当のことを言うはずもなく、戦争とはこのようなものであることを痛切に知らされた。

他のことは考えずに、命ぜられたとおりに塹壕掘りに邁進することしか今後の道を開く方法はない、と考えるようになった。夜間になると、共産八路軍が塹壕の後方から敵陣地に向かって銃撃すると、敵陣地からは何倍も多くの銃弾が飛んでくるので、夜間の攻撃は返って共産党軍の陣地を知らせることになって危険だと申し入れた。しかし、敵の夜襲が恐いので撃つという。八路軍は日本軍のように夜襲することをしなかったので、その点安心であった。

四平街の陣地に来て、塹壕掘りが半月も続いたある日、休暇が出されたので四平街にいる二人の

友人を訪ねた。この二人の友人は家族と共に一緒に暮らしていた。一人は満州国官吏消費組合に勤務する中村長蔵氏で、私とは同じ紫波郡佐比内村出身で一年先輩であった。ほかの一人は四平市公署会計科に勤務する瀧浦轟氏で、紫波郡赤石村の出身でありお互い共通の郷里の話に花が咲き、夕方まで話していた。

その日は八路軍と中央軍の戦闘が一段と激しく、中央軍の飛行機が四平街を爆撃して八路軍を悩ませていた。夕方友人に別れを告げて宿舎に戻る途中、八路軍の憲兵隊に捕らえられ、本部に連行されて取り調べを受けた。私は中国語は全然分らないと言ったので、通訳を通じて行われ、私は四平街の塹壕掘り部隊の一員であると申し出たが納得してくれなかった。彼らがしゃべっている内容は私にもちよつとは分かったが、察するに長春の日本軍将校が脱走したらしく、その一人ではないかと疑っているようで、早速縄を掛けられたが、それは本格的な縛り方でしかも天井に吊された。

通訳の話では、瀧浦氏が私が捕まったのを見ていて、もらい下げにきてくれたとのことだったが、憲兵が塹壕掘り部隊本部の八路軍に調べに行くが間違ひなければ明日釈放になるが、もし脱走将校と認定されれば銃殺されるという。

私も戦争で幸いここまで生き延びてきたが、「おれの人生もこれまでか？ あとは運を天に任せるしかない」と考えると気持ちが楽になり、世の中に恐いものはなくなつたような気がした。

憲兵隊長が八路軍に行き、私が塹壕掘り部隊の一員であることが確認されたということを、夜中に通訳が知らせてくれた。この通訳が今日一緒に話し合った瀧浦氏の部下であつたことも幸いしたようで、同郷の友に感謝の思いでいっぱいであつた。翌日、共産八路軍の兵隊二人が憲兵隊に来て、「この男は我が軍の塹壕掘り部隊の兵隊に間違ひない」と確認したので、無事釈放された。

友人の証言と通訳の協力で感謝しながら、銃殺を免れて帰隊した私は、積極的に塹壕掘りに精を

実施している共産八路軍により破壊されたままの鉄橋の修理とか建物の建設作業の使役などに、進んで参加した。戦争を経験し死線を突破しているので、何も恐いものは無くなつていた。

それから間もなく四平街居留民団に内地引揚げ命令があり、内地に帰れるということになつたが、引揚げ条件として家財道具は現地に残置、リュックサク一つだけ携行が許された。それを知つた中国人は残置する家財道具の所有権を確保するため、私たちが列車に乗る二日も前から、それぞれめぼしをつけた家に泊まり込んできた。どこのだれとも分らない異国人と一緒に寝るのは、あまり気持ちの良いものではなかつた。

出発の当日になると、他の中国人も家財道具などを狙つてきたが、結局は前から泊まり込んでいた中国人に先鞭権があつたようで、全部手に入れたらしかつた。

引揚げの日が決まつたとき、ある家の子供が急病になり、引揚げは無理と医者に診断されて、そ

出した。この事件のあつたところから戦闘が活発化し、中央軍の飛行機による爆撃も激しくなつたので、遂に共産八路軍は夜間密かに我が塹壕掘り部隊を置き去りにして四平街を放棄し、北方の新京方面に敗退した。

次の朝、起床して整列して待機していたが、八路軍の兵隊は迎えに来ないし、付近の中国人も集まつて騒いでいたので聞いたところ、八路軍が昨夕北の方に逃げて行つたとのことであつた。塹壕掘り部隊の一同は相談して、その場で解散することとした。各人がどのような行動をとるかはその自由ということになつた。

私は、先日遊びに行つた中村氏、瀧浦氏宅にお世話になることにした。食事は同氏宅で一緒にし、寝泊りは隣家の二戸郡福岡町出身の黒澤のおばあさん宅にお世話になることにした。この人たちは同郷の人であり、私にとって命の恩人であるところでも感謝している。

四平街在住の居留民となり、満州国居留民団がの家では隣組の人々に相談を持ちかけた。隣組の人々が集まつて相談したが、ある人は、この際病気の子供を殺しても一緒に引き揚げなければ、あとで帰れる保証はないという意見を述べ、別のある人は子供の病気を治して次の引揚げを待つべきだという意見を述べ、意見は二つに分かれた。私にも意見を聞かれたので、「引揚げは今限りではないと思うから、次の引揚げを待つ方がよい」と言った。他にもそういう意見が多く、家族は次の機会を待つことにした。殺した子供は生き返ることはない。ある人は、私に「次の機会があると保証できるのか」と問いかけたが、集まつた人々の意見は変わらなかつた。その家族のその後の消息は分からないが、きつと無事に引き揚げて今は幸福な生活をしていることと私は思っている。

いよいよ引揚げが始まり、列車は発車したが奉天（瀋陽）で停車したまま、それからなかなか発車しなかつた。機関士が金を要求していたので、全員から金を集め機関士に渡したところ、列車は

すぐに走り出した。四平街を出発してから三、四日ぐらいして、錦州省の葫蘆島に到着した。日本からの引揚船が来るまで、四、五日滞在した。その間に持ち物検査があり、お金は一人千円までしか持たず、それ以上持っている人は全部没収された。

乗船して最初の一日は波も静かであったが、二日目は海が荒れて船酔いするものが続出した。みんな顔が青くなり、食事も容易に摂れない状態であった。私のグループ八人もみんな船酔いしていて、私一人が酔わないで八人の食事の運搬など、一切を引き受けた。私も強い方ではなかったが今回は船酔いはなく、みんなの手助けができて幸せであった。葫蘆島を出発して五日目ぐらいに、待望の日本の港、舞鶴港に到着した。直ちに上陸できるものと思っていたが、海外からの引揚者には検疫を受けなければならないと、早速DDTを体中に散布された。その後、所持品を申告して検査を受け、住所氏名の申告、両替などで四日ほど船

変だから、しばらくは家で農業を手伝い、落ち着いたらどこかに就職したらいいだろうと言ってくれたので、安心して農業の手伝いをしながら村の青年たちとも交流を図った。

青年たちと相談して、地元の熊野神社の秋の祭典に、しばらく休んでいた樽御輿を出したので、地域の人に大変に喜ばれた。さらにその祭りで、各戸から頂いたお祝い金で村の公民館を借りて、演芸会を開催することにした。終戦以来、このような行事が少ないので大変珍しがられ、たくさんの人が集まり大勢の出演者がこの地方の手踊りや民謡、さんさ踊りなどを熱演し、盛会なうちに終了することができた。

十二月ともなると、冬期に入り農業も暇になったので、そろそろ転職しようと考え、盛岡市内に出掛けた。岩手県庁に友人が勤務していたので、県庁職員の採用予定がないかと尋ねたところ、人事課に案内されて、そこで近日中に試験があるので希望するなら願書と履歴書を提出するように、

中で宿泊したあと、ようやく舞鶴港に上陸を許された。ここは日本の土地だと思うと感激ひとしおだった。

引揚列車で東京駅に向かい、東北本線に乗り換え、岩手県の日詰駅で下車した。電報を打っていたので迎えが来ていて、紫波郡佐内村の実家に無事に着いた。満州に勤務していた当時に結婚した妻は、昭和十九年にお産のために実家に帰っていて、生まれた子供は三歳になっていた。父親を見たことがないので、「お父さんが帰ってきたよ」と妻が言っても、妻の後ろに隠れるようにしている。「お父さんだよ！」と言ったら、子供は恐る恐る私のそばに来てやっと抱かれるようになった。

実家は元々兄夫婦に姪二人と祖母の五大家族で、そこに私の家族三人が増えて八人家族になった。実家は農家であったが、兄は村役場に勤務していた。主食は何とかあったが、副食などには苦労していた。兄は私に今、町に住むと食糧の確保が大

とのことだこれ幸いと書類をそろえて提出した。

一月二十日、県庁で試験を行うという通知があり、第一日目は学科試験、第二日目は口頭試験で、合否は後日通知するということであった。期待を胸に合否の通知を待っていたところ、「合格した」という通知を受けた。

二月十八日付で地方技官岩手紫波地方事務所勤務を命ずるといふ辞令をもらい、岩手県職員として勤務することになった。

以来昭和四十九年九月三十日まで岩手県職員として勤務して、同年十月一日付で社団法人岩手県農政経済研究所常務理事を拝命し、岩手県の農政経済情報の作成報告を担当、各関係機関に送付するなど県行政（農政）の浸透に努めた。

農政経済研究所での勤務も十年を超えたので、今度は社団法人岩手県開拓振興協会事務局長及び常務理事として転職することになった。

我が国農政を取り巻く情勢は誠に厳しい状況にあり、特に畜産経営を主体とする開拓農家への影

響は計り知れないものがあつた。これに対処するため、開拓農家はもとより、組織をあげて生産性の向上と流通機構の改善に努力することが肝要と考え、開拓振興を目的とし、畜産（肉牛、酪農）、果樹、野菜の生産輸出であるオーストラリア、ニュージーランドへ、開拓関係組織の指導的立場の開拓青年などを派遣し、同国の農畜産事情について研修を行い、私も参加した。オーストラリア、ニュージーランド共にその気候風土は異なるものの、その広大な土地と少ない人口密度とは、かつての満州を彷彿とさせた。そして畜産経営を主体とした開拓農家のあり方などは、満州開拓農家の指導にあたっていた当時を回顧し、共通する問題がたくさんあることを感じた。

もつと早く世界農業の実態に触れていたなら、満蒙開拓農業も今少し違った方策があつたのではないかと思うと、今さらながら残念で致し方ない。

私の人生も、前半生は春秋に富み波乱に満ち満ちた経験をしたが、後半生は平穏にして広い視野

を得る、落ち着いた半生となつた。

これも世が平和であるからと、つくづく感謝するところである。